実践レポート

児童が運動の楽しさを実感できる体育学習について
－児童のつまずきを予測した「走り幅跳び」の実践を通して－

綾川町立陶小学校
教諭　大林　紀章

１　はじめに

体を動かすことが好きな児童と一方で運動する機会が少なく運動することに苦手意識がある児童の二極化が進んでいる。そこで、どの児童もその運動がもつ楽しさを実感することができ、生涯スポーツにつながるような体育学習にしたいと思い、児童のつまずきを予測した教材研究により、児童が意欲的に取り組める「走り幅跳び」の授業実践を行った。

また、教員の若年化も進行しており、教員間の学び合いや協働する力がより一層求められている。さらに、急速な世代交代により指導技術や知識等の伝達機会の確保も課題である。現職教育の場において、本実践が若年教員や体育を専門としない教員の研修資料の一助になるようにと考えた。

２　実践の内容・方法

（１）実践の概要

まず、走り幅跳びがもつ良さを３点挙げる。①リズミカルな踏み切りから、ふわっと跳び上がる感覚が気持ちいい。②記録に挑戦したり、相手と競争したりする楽しさや喜びがある。③自己の課題を見付け、その解決のために工夫することができる。

次に、走り幅跳びを指導する際の難しさを３点挙げる。①個人種目であり、協働的に取り組むことが難しい。②競技するまでの待ち時間が長い。③「片足踏み切り」「両足着地」ができない児童がいる。

このような走り幅跳び特有の良さを生かし、指導の難しさを改善することで、走り幅跳びを通して、児童がより運動の楽しさを実感できるようにした。

（２）単元計画

次	一次（１時間）	二次（２時間）	三次（２時間）	四次（１時間）
学習活動	「安全な着地」の仕方を確認したり、今の自分の記録を知ったりする。	歩数の目安をもとに自分にあった助走距離を見つけ練習する。	跳躍に高さが出ると記録が伸びることを理解し、跳躍に高さを出すためのコツを考え練習する。	個人の部と「走り高跳びめあて表」をもとにした団体の部で記録会をする。

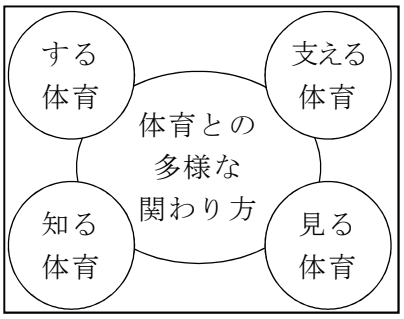
（３）協働的な学びを生み出すグルーピングの工夫

「走り幅跳びめあて表」の得点をもとに、学級を４つの等質グループに意図的に分けた。「走り幅跳びめあて表」とは、走力（５０ｍ走の記録）をもとにした走り幅跳びの目標記録、及び目標記録を得点化したものを示した表である。そして、単元終盤にグループでの得点を合計したもので記録会を実施した。このようにすることで、

運動自体は　個人種目でも必要感のある協働的な学びの場になるようにした。

また、「走り幅跳びめあて表」を用いることで、走るのが速い児童の得点が低く、走るのがあまり速くない児童の得点が高くなる場合もあり、運動が得意な児童はより意欲をもって、運動が苦手だと感じている児童は安心感をもって練習や記録会に参加することができた。

加えて、走り幅跳びの学習をする場合、競技するまでの児童の待ち時間が長くなることがある。そこで、４つのグループに役割をもたせた。役割分担する際、競技をする「する体育」、砂場を整備する「支える体育」、タブレットで撮影する「見る体育」、走り幅跳びのコツを考える「知る体育」の観点をもって役割分担をした。役割分担を通して、体育との多様な関わり方を児童に提示した。



走り幅跳びめあて表

５０ｍ走タイム（秒）	目標記録（ｃｍ）	1点	2点	3点	4点	5点	6点	7点	8点	9点	10点
８．１	３０４	0～243	244～258	259～273	274～288	289～303	304～318	319～333	334～348	349～363	364～
９．０	２６８	0～207	208～222	223～237	238～252	253～267	268～282	283～297	298～312	313～327	328～
１０．０	２２８	0～167	168～182	183～197	198～212	213～227	228～242	243～257	258～272	273～287	288～
１１．０	１８８	0～127	128～142	143～157	158～172	173～187	188～202	203～217	218～232	233～247	248～
１２．０	１４８	0～87	88～102	103～117	118～132	133～147	148～162	163～177	178～192	193～207	208～

【走り幅跳びめあて表の一部】

（４）遊び感覚を活かしたスモールステップでの指導

児童の中に、跳び箱のように両足踏み切りをしてしまったり、また片足着地をしてしまったりする児童が何人かいる。そこで「グリコ遊び」を想起させて、走り幅跳びの跳躍のリズムが「チ・ヨ・コ・レ・ー・ト」と似ていることを指導した。「チョコレートットットにならないように気をつけたい。」と児童が発言するなど、児童にとって動きがイメージしやすく、両足踏み切り、片足着地の改善につながった。

その後、ブルーシートを敷いて「川跳び」をした。川の幅を変えることで、挑戦へ

の意欲が増し、児童は楽しく活動に取り組むことができた。

助走の学習では、授業の導入に「１１歩→７歩助走、１５歩→９歩助走、１９歩→１１歩助走」という助走の目安を児童に提示した。児童は、その目安をもとに自分に合った助走を見つけ記録を大幅に伸ばすことができ、走り幅跳びに対する意欲を高めた。

【チョコレート跳び】

【川跳びの様子】

【助走の学習】

（５）走り幅跳び特有の楽しさを実感できる指導の工夫

単元の早い段階で、児童は「助走が合わない。助走が合えば、記録が伸びるのではないか？」と助走に関する活動と「もっと高く跳んだらいいのではないか？手を振りあげて跳んだらもっと跳べるのではないか？」と跳躍のコツに関する活動の必要性に気がついていた。また、助走の学習後、少し記録が伸び悩むことが教師に予測できていたので、助走の学習から跳躍のコツを考える学習に円滑に移行することができた。

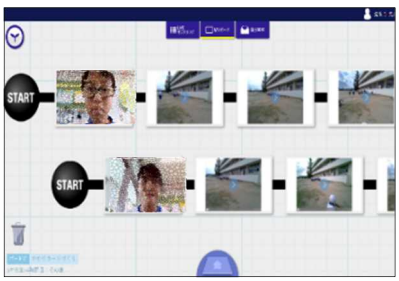
跳躍のコツを考える授業では、導入で跳躍に高さが出ると記録が伸びることに気付かせるため、理科の授業で使う「演示用空気鉄砲」を用い、視覚的な支援をした。そして、そのことを実感させるために踏み切りに跳び箱を設置した。ロイター板ではなく跳び箱を設置した理由は、ロイター板に比べ、跳び箱は跳躍に高さは出ないけれど、高さを出すのに高い技術を必要としないため、児童の実態に合わせて跳び箱を選択した。多くの児童が、跳んだ瞬間のふわっとした感じを感じ取ることができた。

【跳び箱からの跳躍の様子】

（６）児童の相互評価・振り返りの工夫

「ピタリ賞シール」や「タカタカシール」を準備し、うまく助走できていた児童や高く跳躍ができていた児童を児童同士で評価できるようにした。これらのシールは児童の意欲化を図るものにしたい、また屋外の授業の中ですぐにできる評価にしたいと考え実践した。

また、学びの実感を伴った振り返りができるように、１人１台端末（以降：タブレット端末）を活用して助走や跳躍の様子を撮影し、「動画によるポートフォリオ」にまとめた。自他の動きを客観的に振り返ることができるため、次時への課題につなげたり本時の変容に気付いたりすることができた。体育授業の振り返りにおいて有効な方法であると考える。



【動画によるポートフォリオ】

なお、タブレット端末上で使用した学習支援ソフトは、ベネッセが提供している「オクリンク」である。「オクリンク」では、タブレット端末上でカードを作成し、さらに作成したカードを繋げていくことで、手軽にプレゼンテーション資料にまとめることができる。本実践では、カードを作成する際に跳躍の様子を撮影した動画を用いることで、「動画によるポートフォリオ」にまとめた。

3　実践の成果

「１回、１回跳ぶたびに記録が伸びてうれしかった。」「今まで伸びなかった記録が伸びてうれしかった。」「いろんなことに気をつけて５５㎝も伸びてうれしかった。」など、児童の振り返りから個々の成長の仕方を見取ることができた。そして、本実践を通してどの児童も達成感を味わい、運動の楽しさを実感することができたことが分かる。また、現職教育でも本実践を紹介した。「走り幅跳びの授業で悩んでいたところが解決できてよかった。単元の組み方や必要な支援、無駄のない準備物など勉強になった。」という意見をもらうことができた。

4　普及させたい取組と期待される効果

本実践でチャレンジした取組の一つとして、タブレット端末を活用した「動画によるポートフォリオ」を挙げる。タブレット端末を活用することが学習の手段ではなく目的になってはいけないことを念頭に置きつつも、「まず、使ってみよう。」という姿勢で取り組むことでＩＣＴの良さを発見していきたいと考えた。

本実践では、静止画に比べ、タブレット端末を活用し動画で記録していくことで、児童も教員もより視覚的に成長を実感することができた。また、タブレット端末を活用して、写真や動画を撮影することは、比較的、児童にとって容易な技術であるので他教科でも応用できると考える。

5　課題及び今後の取組の方向

児童の主体性が伸びる授業づくりの中で、教師はどのような立ち位置でどのように児童に関わっていくのかが課題である。児童の「主体性」が求められる授業づくりにおいて、教師が「教えない授業」と言われることもあるが、私自身は、今回行った実践のように、児童のつまずきを予測した支援が必要ではないか、教え込みとは違った学びを支える「教え」や「しかけ」が重要ではないかと考える。

この課題に対するはっきりとした正解があるわけではないが、この課題解決に向けて考え続け、教材研究に深く取り組む教師の姿勢が、今後、児童や若年教員にとって一番の教材になっていくようにしたい。

【模型を使ったまとめ】

（参考文献）

・「教材アイデア」絶対成功の指導 BOOK／関西体育研究会著／明治図書
・学習カードでよくわかる３６５日の全授業小学校体育５年／関西体育研究会著／明治図書